

日本語名詞句内部の階層構造と移動

著者	竹沢 幸一
雑誌名	文藝言語研究. 言語篇
巻	24
ページ	45-80
発行年	1993-08-31
その他のタイトル	Configurational Structure and Movement in Japanese Noun Phrases
URL	http://hdl.handle.net/2241/13602

日本語名詞句内部の階層構造と移動*

竹 沢 幸 一

0. はじめに

生成文法において、日本語がいわゆる「階層型言語」(configurational language)か「非階層型言語」かに関する論争以来、文(S)に関してはその階層的な構造上の特徴がかなりの程度明らかになってきている。しかし、日本語の名詞句(NP)の内部構造に関する研究は、Murasugi (1990)に「の」の分析を中心とした優れた研究はあるものの、まだその数は非常に少ない。本稿の目的は、英語との比較、および照応詞「自分」とその先行詞の束縛関係の考察に基づいて、日本語の名詞句の構造的特性を明らかにすることである。以下では、理論的側面よりも主に事実観察に重点を置いて議論を進めていくが、本稿での考察がもつ最近の理論に対する意味合いについても適宜触れながら考察を行なっていきたい。またスペースの都合上、関係文献への言及は最低限必要なものだけにとどめた。

1. S と NP の対応関係

1.1 X' 理論と階層性

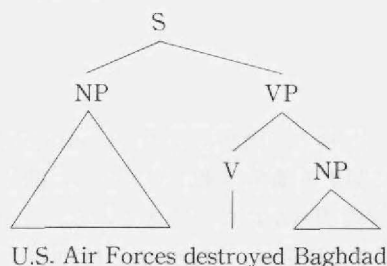
(1) に見られるようなSとNPとの対応関係は生成文法の初期の時代からその中心的な課題の一つとして論じられてきている。

- (1) a. U.S. Air Forces destroyed Baghdad
- b. U.S. Air Forces' destruction of Baghdad

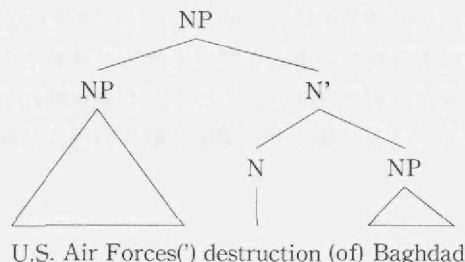
Chomsky (1970) は、(1) の a と b の対応を Lees (1960) が提案するような非常に強力な変形規則を用いて関連付けようとするいわゆる「変形論的仮説」

(Transformationalist Hypothesis) の問題点を指摘し、語彙範疇間の投射構造 (NP, VP, AP, PP) の共通性を捉えるための X' 理論の導入と語彙部門の体系化によってこの対応を説明する「語彙論的仮説」(Lexicalist Hypothesis) を提案した。この語彙論的仮説の下では、(1) の S と NP の対応関係はおおよそ (2) に示すような構造として捉えられている。

(2) a.



b.

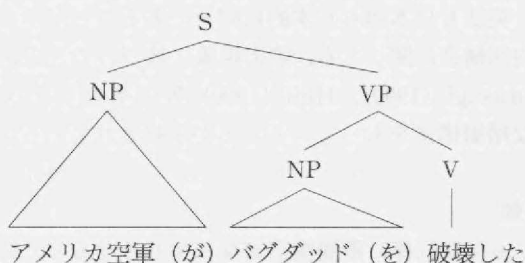


(2) では、S と NP における「主語」U.S. Air Forces と「目的語」Baghdad の構造的位置の非対称性が階層関係上平行的に捉えられる。つまり、こうした X' 理論に基づいた句構造を S と NP に対して仮定することにより、動詞 destroy とその名詞化形 destruction が共通してもつ語彙の意味情報、つまりそれらがともにとる [Agent, Theme] という項構造を統語部門における S と NP の双方の D 構造上の階層関係の中に平行的な形で反映させることが出来る。

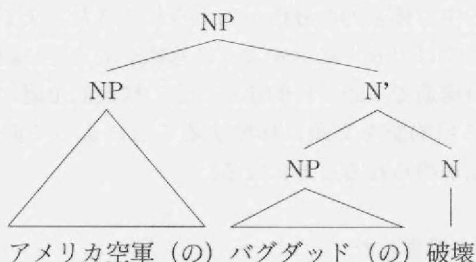
もしこの Chomsky の提案が普遍的意味合いをもつとするなら、当然 (3) の日本語の S と NP との対応関係も下の (4) に示すような構造として捉えられなければならない。

- (3) a. アメリカ空軍がバグダッドを破壊した
 b. アメリカ空軍のバグダッドの破壊

- (4) a.

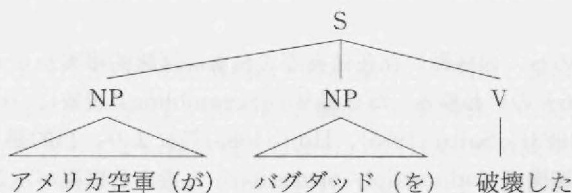


- b.



日本語の生成文法研究においては長い間、文末の動詞以外の要素の語順が極めて自由なことから、Sの内部構造が階層性をもっているのかどうかを経験的に論証されず、Farmer (1980), Chomsky (1981) 等では日本語のSは階層構造ではなく(5)に示すように「平板」構造(“flat” structure)をしているという提案もなされていた。

- (5)



しかし, Saito and Hoji (1983), Saito (1985), Hoji (1985)をはじめとする「自分」や「彼」等の照応表現とそれらの先行詞の間に見られる構造的制約に関する研究により, 日本語のSも(4a)に示すような階層構造をもっていることが明らかにされ, 語順は別にして主語と目的語の間の階層的な非対称性の側面に関しては, 英語も日本語も基本的に同一であることが示された。さらに, 日本語のNP内部構造に関しても, 照応現象に基づいてSaito(1984, 85), Fukui (1986), Murasugi (1990), Hoji (1990)等でやはりSの場合と同様に(4b)に示すような階層構造をもっていることが示唆されている。

1.2 階層性と移動

ひとたび日本語にも英語同様, 階層構造が存在するとなると, 様々な論理的帰結が導かれることになる。特に重要な問題となるのは移動操作との関係においてである。Sに関する階層構造と移動の関係には1980年代半ばからこれまで日本語の生成文法研究の中で体系的な分析が加えられてきた。まず, よく知られているように, 日本語では(6)に示すように意味を変えずに語順を入れ替えることが出来るが, D構造で主語と目的語が一定の構造的位置に生成されるならば, (6b)は(6a)から目的語を文頭に移動することによって派生されなければならないという帰結が得られることになる。¹⁾

- (6) a. 太郎が花子を殺害した
- b. 花子を太郎が殺害した

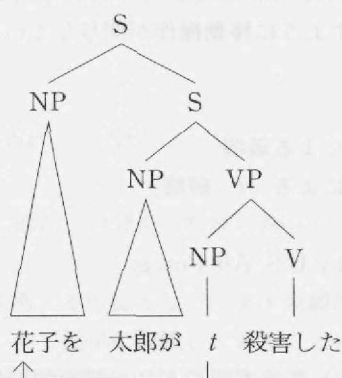
さらに, (7)の受動文に関しても, それに対応する英語の受動文と同じように, 目的語を主語の位置に移動させる移動操作が関与しているという結論が導かれる。

- (7) 花子が太郎に殺害された
- (8) Hanako was killed / by Taro

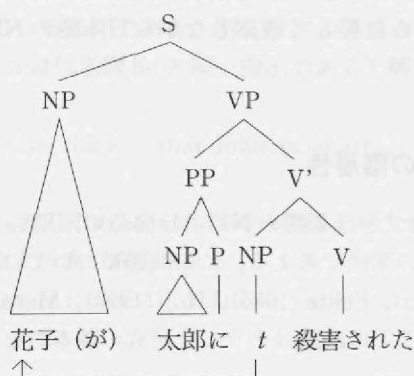
こうした日本語のSでの移動の存在は実際これまで経験的事実から十分に証明されている。(6)のいわゆる「かき混ぜ」(Scrambling)現象については, Saito and Hoji (1983), Saito (1985), Hoji (1985)等により, 目的語NP「花子を」のSへの付加操作(adjunction operation)と考える根拠が示されてお

り、(7)の受動文に関しては、Miyagawa (1989) 等によりD構造の目的語NPの主語位置 [NP, S] への代入操作 (substitution operation) が関与していることが日本語独自の経験的データに基づいて論証されている。具体的に図示すると、かき混ぜ文と受動文は次のように派生されることになる。

(9) a.



b.



以上のようなS内での階層構造と移動操作との関係の議論は盛んに行なわれてきているが、一方NP内部の階層構造と移動操作との関係に関する研究はほとんどと言ってよい程見当たらない。もし(3b)の名詞句が(4b)に示すD構造をもつのであれば、次の(10)は(11)に示すように移動によって派生され

と考えねばならない。

(10) バグダッドのアメリカ空軍の破壊

(11) バグダッドのアメリカ空軍の *t* 破壊

↑

さらに、(12) の受動的名詞句 (passive nominal) とよばれる例でも、(14) の英語の場合と同様に、(13) に示すように移動操作が関与していることになる。

(12) バグダッドのアメリカ空軍による破壊

(13) バグダッドのアメリカ空軍による *t* 破壊

↑

(14) Baghdad's destruction *t* by U.S. Air Forces

↑

英語との構造上の対応関係の観点から日本語の NP の統語的特性を考える
と以上のような帰結が得られるが、こうした帰結は経験的な証拠に基づいて独
立した根拠付けが与えられなければならない。以下では、この節での議論を出
発点にして、S との対応をさらに詳しく観察しながら日本語の NP の構造的
特性について考えてみる。

2. 日本語の名詞句内部の階層性

本節では、S との比較に基づき日本語の NP の D 構造の階層性について照
応表現「自分」の束縛現象との関係で考える。この問題については、前節でも
触れたように、Saito (1984, 85), Fukui (1986), Hoji (1990), Murasugi (1990)
等で少し論じられており、ここでの議論はそうした研究の基本的な洞察の上に
立って進めていく。

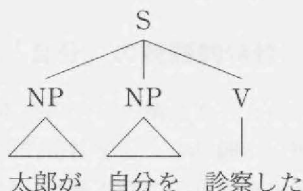
照応表現の「自分」を含む次の S と NP の対応について考えてみよう。

(15) a. 太郎が自分_iを診察した

b. 太郎の自分_iの診察

(15) ではSとNPのどちらにおいても下付き指標*i*で示されているように「自分」は「太郎」を先行詞としてとることが出来る。この事実が意味するところを、照応に関わるNP間の階層的関係に基礎を置く束縛理論の観点から考えてみよう。上の(15a)に対してもし次のような平板構造を仮定すると、束縛理論上問題が生じてしまうことになる。

(16)



この問題を考える前提として、まず束縛理論の中でここでの議論に直接関係する部分について簡単に概観しておくことにする。束縛理論には、その一つの制約として「指示表現」(以下、R表現 (R-expression))は「自由」でなくてはならない、つまり同じ指標をもつ同一指示の要素に「c統御」(c-command)されてはならないという条件がある。²⁾これは一般に束縛理論の Condition Cと呼ばれている条件である。例えば次の英語の例においてこの Condition Cのため John は代名詞 he と同一指示であると解釈されることは出来ない。

(17) * [He_i thinks [that John_i is smart]] ³⁾

つまり、R表現である John は同一指標をもつ he によってc統御されるため、この文の非文法性が説明される。

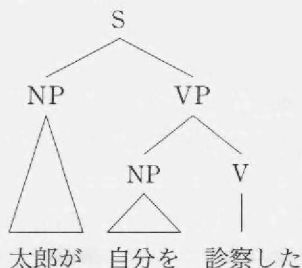
日本語の場合も同様に、次の文の「自分」は「太郎」を先行詞としてとれない。

(18) * [自分_iが [太郎_iが賢いと] 思っている] (こと) ^{4,5)}

この日本語の文もまた、R表現の「太郎」が「自分」によってc統御されるため、(17)の場合同様、Condition Cによりその非文法性が説明される。(16)に戻って、もしこの平板構造を仮定したとすると、「太郎」は「自分」によ

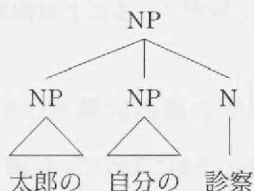
てc統御されることになり、それらの間に成立する照応関係が説明出来なくなってしまう。つまり、「太郎」が「自分」によってc統御されるため Condition Cの違反として非文法的であることが予想されてしまい、事実と合致しない。したがって、(15a)は(19)に示す階層構造をもたなければならないことになる。

(19)

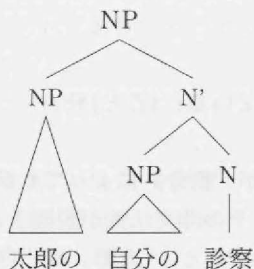


このSの場合と全く同様に、NPでの「太郎」と「自分」の束縛関係を説明するためには、(20a)ではなく(20b)の階層構造を立てる必要がある。

(20) a.



b.



以上、「自分」とその先行詞との照応関係を説明するには、NP 内部にも S の場合同様、「主語」と「目的語」の間の構造的非対称性を保証するための階層性を認める必要があるを見た。しかしながら、問題はここで見たよりもずっと複雑であり、より幅広いデータの検証が必要である。以下では、新たな「自分」の照応関係に関するデータを加えながら、NP の内部構造と移動操作の関係を S との比較により詳しく検討していく。

3. 「自分」の統語的特性

日本語の NP の構造を S との対応でさらに詳しく分析するためには、「自分」の統語的特性をもう少し細かく観察する必要がある。よく知られているように、「自分」は基本的に主語のみをその先行詞としてとることが出来る。

- (21) a. 太郎_i が次郎_j を自分_{i,*j} の部屋で殺害した
b. 太郎_i が次郎_j に自分_{i,*j} のことを話した

(21) では「自分」は主語の「太郎」を先行詞にとることは可能だが、非主語の「次郎」を先行詞としてとることは出来ない。そして、主語であっても「自分」を c 統御していない場合は、照応関係は成り立たない。

- (22) [太郎_i が自分_{i,*j} の弟に [次郎_j が来たと] 言った]

この文では埋め込み文の主語「次郎」は主文にある「自分」を c 統御出来ないため、その間の照応が成り立たない。⁶⁾

さて、この「自分」に見られる主語指向性は表面的な語順の入れ替えに影響を受けない。次の例文を考えてみよう。

- (23) a. 太郎_i が自分_i を診察した
b. *自分_i が太郎_j を診察した
(24) a. 自分_i を太郎_j が診察した
b. *太郎_j を自分_i が診察した
(25) a. 太郎_i が自分_i の友人を診察した
b. *自分_i の友人が太郎_j を診察した

- (26) a. 自分_iの友人を太郎_jが診察した
 b. *太郎_jの友人を自分_iが診察した

(24) と (26) はそれぞれ (23) と (25) から目的語をかき混ぜ規則によって前置した文であるが、前者の「自分」の照応可能性は後者のそれをそのまま引き継いでいる。つまり、(24) と (26) の a では表面上、先行詞が「自分」より前に現われているにもかかわらず照応関係が成り立たないのに対して、b では前置された句の中の「自分」は、S 構造の先行関係からだけ見ると後方に位置する主語と同一指示が可能となっている。こうした現象は「連結性」(Connectivity)あるいは「再構造化効果」(Reconstruction effect)と呼ばれており、束縛理論上、かき混ぜ規則によって移動された要素はその先行詞との関係付けが移動適用の前の位置において行なわれなければならないことを示している。具体的に(24a)を例にとると、前置されたNP「自分を」は、移動後の文頭の位置ではなく、下に示す構造の痕跡 t の位置、つまり、D構造の目的語の位置においてc統御に基づく束縛条件を満たさなければならない。

- (27) [_S 自分_iを [_S 太郎_jが [_{VP} t 診察した]]]

このように、「自分」とその先行詞との照応関係は表面的な先行関係によっては決定できない。⁷⁾

さらにもう一つ「自分」に関して注目すべきことは、「自分」の先行詞の決定は主題関係等の意味情報に基づいて行なわれているのではないという点である。次のペアを考えてみよう。

- (28) a. 太郎_jが次郎_iに自分_{i,*j}の履歴書を送った
 b. 次郎_iが太郎_jから自分_{i,*j}の履歴書を受け取った

(28) の「送る」と「受け取る」は主題関係上同じ [Source, Goal, Theme] という項構造をもつ動詞であり、その違いは、「送る」の場合 Source が外項 (external argument) として指定されており、統語上それを主語として具現化するのに対して、「受け取る」の方は Goal が外項でありそれを主語として文構造上に具現化するという点にある。そして (28) の指標が示すように、「自分」は Source 対 Goal の主題関係の対立に基づいて決定されてはならず、必

ず文法上の主語にその先行詞を求めていることが分かる。(28)の対立に関しては、主語の位置に「二次的に」与えられる Agent 的な主題役割が「自分」の先行詞決定に影響していると考えられる人もいるかも知れない。しかしながら、そうした主題関係が「自分」の先行詞決定に関与していないことを示す決定的な例として能動文と受動文の間に見られる対立をあげることが出来る。

- (29) a. 太郎_i が次郎_j を自分_{i,*j} の部屋で殺害した
 b. 次郎_j が太郎_i に自分_{i,*j} の部屋で殺害された

(29a)の能動文では「太郎」が先行詞となっているが、それに対応する受動文の(29b)では「主題上の主語」、つまり Agent の役割をもつ「太郎」ではなく、表面上の主語「次郎」のみが「自分」の先行詞となれる。

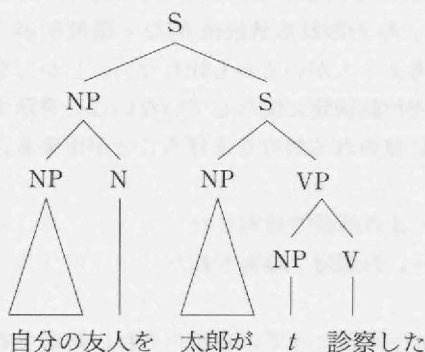
以上、「自分」とその先行詞との間に見られる制約について概観したが、まとめると「自分」の先行詞決定の要因は、表面的な語順でも意味的な主題関係でもなく、c 統御と S 構造における主語指向性に求められなければならないことを見た。

4. A/A' 移動の区別と「自分」

前節では「自分」の照応について基本的な特徴を概観したが、本節では移動操作との関係でその特性をさらに深く考察する。

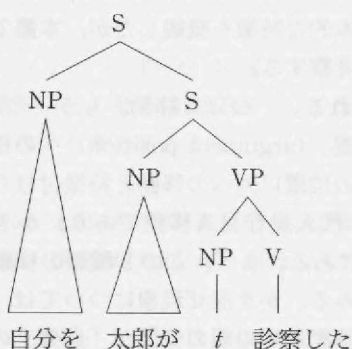
最大投射 XP の移動は2つに分類される。一つはA移動、もう一つはA'移動と呼ばれているが、前者は「項の位置」(argument position)への移動、具体的には主語位置への移動、後者は項の位置以外への移動と特徴付けられる。受動文のNP前置による主語位置への代入操作はA移動であり、かき混ぜ規則による付加操作は基本的にA'移動である。まず、この2種類の移動操作と「自分」の照応可能性について考えてみる。かき混ぜ現象については、前節でも見たように、移動先の位置ではなく移動適用の前の位置が「自分」の束縛に関して重要な役割を果たす。上で見た(26a)の例をもう一度考えてみよう。(26a)は次のようなS構造をもつ。

(30)



この構造で「太郎」は「自分」をc統御していない。先行詞による「自分」のc統御の条件がこのS構造に適用されたと考えると、照応関係が不可能であることを予測してしまう。しかし、実際には可能なので前置された「自分の友人を」はこの条件に関して元の痕跡の位置にあるかのごとくみなされなければならない。さらに(24a)について見てみる。(24a)は(26a)同様、次のような構造をもつ。

(31)



ここでは「太郎」が「自分」をc統御していないという(30)の場合と同様の問題に加えて、もう一つ別の問題が生ずる。ここで思い出して欲しいのは2節で見た束縛条件のCondition Cである。この条件は今上で見た「自分」がその先行詞によってc統御されなければならないというのとは逆に、R表現がそ

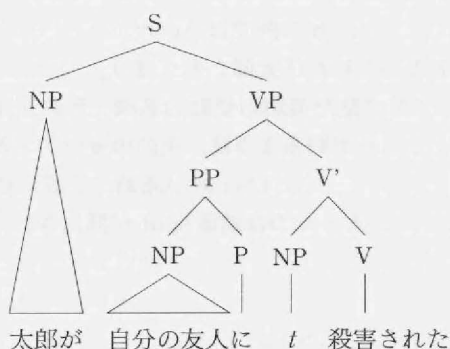
れと同一指示の要素によってc統御されてはならないことを定めたものであった。もしこの Condition C が上の構造に適用されると仮定すると、R 表現「太郎」が「自分」によってc統御されているので、こちらの条件からも「太郎」と「自分」の間の照応は成立しないことを予測してしまうことになる。したがって以上の観察から、A' 移動の場合は束縛条件に関して事実上移動がなかったものとして捉えられなければならないという一般化が得られる。

次にA移動を含む受動文の場合を考えてみよう。

- (32) 太郎_iが自分_iの友人に殺害された

この文は次のようなS構造をもつ。

- (33)



この文では「太郎」と「自分」との間の照応が可能であるが、「自分」が先行詞によってc統御されていなければならないという条件を考えてみると、(33)のS構造はこの条件を満たしている。つまり、A移動の場合、移動前の位置ではなく移動先の位置が「自分」の照応を決めるのに関わっていることが分かる。これは、先に見たA'移動の場合とは逆の現象であり、A移動とA'移動の特徴的な違いである。⁸⁾

5. NP内の移動と「自分」の照応

今までSにおける「自分」の統語的特性を観察してきたが、この節ではこれ

までの観察に基づいて日本語の NP の構造と移動について詳しく考える。

5.1 受動的名詞化形 (1)

前節で見た S における A 移動と A' 移動の差を念頭において次の例を考えてみよう。

- (34) a. 太郎_i の自分_j の友人による殺害 (はとても不幸な出来事だった)
 b. ??自分_j の友人による太郎_i の殺害 (はとても不幸な出来事だった)
- (35) a. 太郎_i の自分_j の先生による審査 (はまだ行なわれていない)
 b. ??自分_j の先生による太郎_i の審査 (はまだ行なわれていない)

これらの例では、Theme の太郎が「の」によってマークされ、Agent の「自分の先生/友人」は複合後置詞「による」によってマークされている。それぞれの a の例では Theme の「太郎」が、b の例では Agent の「自分の先生/友人」が先頭に来ているが、前者の方だけが「太郎」と「自分」の照応を許すように思われる。この違いは 1.2 節で見た英語の受動的名詞化形の派生との対応に基づいて説明出来る。よく知られているように、英語の受動的名詞化形には基本的に二つの構造が可能である。一つは Theme が先頭の位置に属格's を伴って現われる (36a) の場合であり、もう一つは前置詞 of が挿入されてそれが N の後ろに現われる (36b) の場合である。

- (36) a. Baghdad's destruction by U.S. Air Forces
 b. destruction of Baghdad by U.S. Air Forces

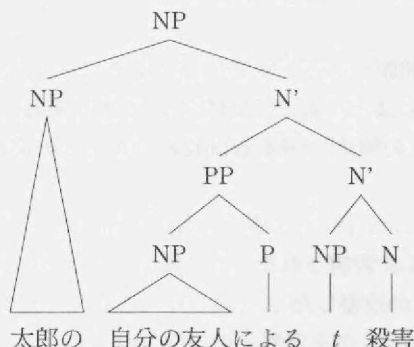
そしてすでに見たように、a の例は次のように派生されると考えられている。

- (37) [_{NP} Baghdad's [_{N'} destruction *t* by U.S. Air Forces]]
- ↑

これは S の受動化と同じように、NP 内で Theme の Baghdad が補部 (complement) の位置 (つまり「目的語」位置) から指定辞 (specifier) の位置 (「主語」位置) へ移動したもの、言葉を変えると A 移動したものと考えることが出来る。これを基にして、(34)、(35) の日本語の例に戻って考えてみる。a

の場合には英語同様、A 移動が関与しており、1. 2 節で見たように、次のように派生されると仮定してみよう。

(38)



A 移動の場合、先に見たように元の痕跡の位置ではなく移動先の位置が束縛条件に対して重要である。(38) では「主語」の位置にある「太郎」が「自分」を c 統御しているのでその間の照応関係は正しく説明され、この派生の正しさが経験的に支持される。

さて、(34)、(35) の b の場合であるが、文法性の判断に関してそれに対応する S と不思議な対照を示す。(39) は表面上 (34)、(35) の b の形と対応する語順をもっている。

- (39) a. 自分_iの友人に太郎_jが殺害された
b. 自分_iの先生に太郎_jが審査された

これらの受動文では「太郎」と「自分」の間に照応が成り立つ。この S と NP の受動形の「自分」の照応可能性に関する違いはどこから生ずるのであろうか？ まず S の受動形について考えてみよう。S の場合、その受動化には A 移動が関与していることはすでに見た。

- (40) [_S 花子が [_{VP} 太郎に t 殺害された]]

しかしこの文に対してはもう一つの派生の可能性を考えることも出来る。つ

まり、(41) に示すように「花子が」がかき混ぜ規則によってSに付加されるとする考え方である。⁹⁾

- (41) [_S 花子が [_S *e* [_{VP} 太郎に *t* 殺害された]]]

しかしこの考え方には経験的な問題がある。すでに見たように、もし受動文におけるNP前置がかき混ぜ規則によって起こるのなら、つまりそれがA'移動であるとしてしまうと、「自分」の照応に関する(42)のaとbの文法性の差が説明できなくなる。

- (42) a. *自分_iの友人が太郎_jに殺害された
b. 自分_iの友人を太郎_jが殺害した

さらに英語の場合、受動文におけるNP移動は義務的なものであり、元の目的語の位置に留まることは出来ない。

- (43) **e* was killed Mary by John

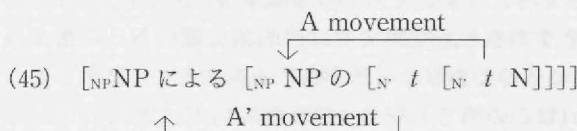
英語との対応性を考えるなら、やはり日本語の受動文にも主語の位置への移動、つまりA移動があると考えerほうが妥当である。とすると、(39)にあるような「NPに NPが」の受動文の語順は次に示すように派生されると考えられる。

- (44) [_SNPに [_SNPが [_{VP} *t* [_{V'} *t* V られる]]]]
-

つまり、受動化による目的語NPの主語位置への移動とPP「に」句のかき混ぜ規則による前置の二つの移動操作が関与していると考えられる。こう考えれば、受動文の「が」句の前置をA'移動とみなすことによって生じたような問題は起こらない。

NPの受動形に話を戻そう。(34)、(35) で見た二つの語順、つまり「NP

のNPによるN」と「NPによるNPのN」であるが、前者はA移動によって派生されることはすでに見た。一方、後者の語順については、Sと平行的に次のような2回の移動を含む構造とは考えられない。



なぜなら、この派生を仮定すると、(34)、(35)のbで「自分」と「太郎」の照応が可能なことを予測してしまうからである。しかし、これらは(42)のSの場合と違って照応が不可能である。とすると、この語順はD構造をそのまま保っている、つまり(46)のS構造を持つと考えられる。

- (46) $[_{NP} e \text{ } [_{N'} \text{NP による } [_{N'} \text{NP の N}]]]$

この移動を含まない構造であれば、(34)、(35)のbの非文法性は「自分」が先行詞の「太郎」にc統御されないということから簡単に説明出来る。こう考えることは英語との比較からもその妥当性を裏付けることが出来る。先にも触れたように、英語ではSの受動形の場合、目的語NPの主語位置への前置が義務的であるのに対して、受動的名詞化形の場合には2通りが可能である。その違いを下に繰り返しておく。

- (47) a. $[_S \text{Baghdad was } [_{VP} \text{destroyed } t \text{ by U.S. Air Forces}]]$
 b. * $[_S e \text{ was } [_{VP} \text{destroyed Baghdad by U.S. Air Forces}]]$
 (48) a. $[_{NP} \text{Baghdad's } [_{N'} \text{destruction } t \text{ by U.S. Air Forces}]]$
 b. $[_{NP} e \text{ } [_{N'} \text{destruction of Baghdad by U.S. Air Forces}]]$

「自分」の照応可能性から見たこれまでの日本語のSとNPの受動形の派生は基本的に英語の場合と同じであるということが言える。ただ一つ違うのは、日本語の場合、英語にはないかき混ぜという現象があり、これによって表面的に少し分りにくくなっているという点である。

さてここで理論的に問題になるのは、英語でも日本語でもなぜSの受動形の

場合はA移動が義務的であり、NPの場合は随意的であるのかという点である。この問題に答えるためには、NPとSの格付与 (Case assignment) の違いについて論ずる必要がある。まず英語のSの受動形の派生をGB理論における「格理論」(Case Theory)の観点から簡単に見ておく。他動詞は能動文では目的語位置にあるNPに対格を与えるが、それが受動文の過去分詞形になるとその格付与能力を失う。そうすると、受動文では目的語位置のNPに格が与えられず、NPがその位置にそのまま留まると「格フィルター」に抵触してしまう。¹⁰⁾したがって、(47b)はこの格フィルターのために非文となる。

この格フィルターから逃れるためには、NPは格を与えられる別の位置、つまりInflによって統率(govern)され、主格が与えられる時制文の主語の位置に移動しなければならない。受動文の場合、主語位置はD構造で空になっているので、この位置への移動は可能であり、かつ(47a)のようにそのNPは格を受け取るために必ず主語の位置に現われなければならないことになる。

以上がおおまかな格理論に基づく英語受動文の義務的なA移動の説明であるが、一方NPの場合には格付与のメカニズムが異なっている。NP内での格付与についてはいくつかの考え方があるが、ここではChomsky (1981)の方法を見ておく。まず、(48)はともに(49)に示すD構造をもっている。

(49) [_{NP} e [_{N'} destruction Baghdad by U.S. Air Forces]]

主要部のNはそれ自体格付与要素ではなく、補部の位置にあるBaghdadはこのままでは格を受け取れず、格フィルターに抵触してしまう。しかし英語にはこれを救うための装置が2つ存在している。一つはof挿入規則、もう一つは移動により属格'sが与えられるNPの主語の位置への移動である。of挿入規則と属格付与はそれぞれ次のように定式化されている。

(50) a. of insertion

NP → [_P of] NP in env.: [+N] ____ (Chomsky (1981; p. 50))

b. Genitive assignment

NP is genitive in [_{NP} ____ X'] (Chomsky (1981; p. 170))

ここでof挿入が随意的規則であるとするなら、(48a, b)の二つのS構造が自動的に導かれることになる。つまり、of挿入規則が適用されればaの構造が

派生され、されなければ格理論により移動が起こり、bの構造が派生される。¹¹⁾

詳細に関しては立ち入らないが、いずれにしろNPはSとは異なり、補部の位置のNPはofによってその格が保証され得るので、移動が起こらなくてもよいということになる。簡単に英語のSとNPの格付与の違いを要約すると、Sの場合は、動詞が受動形態をとることによってその格付与能力が失われてしまい、目的語NPはそのままの位置で対格を与えられないため主格をもらえる主語の位置へ義務的に移動しなければならないのに対して、NPではofにより目的語NPの格が随意的に保証されるので、移動も随意的にしか起こらないということになる。

次に日本語の格付与について考えてみよう。まずSの受動形の場合には、英語と同じように、動詞が受動形態(V-rareru)をとることによって対格付与能力が失なわれるとする。ここで日本語の「が」が英語の主格同様、主語位置にしか与えられないと考えると、目的語NPは主格「が」をもらえる主語の位置に移動しなければならない。¹²⁾ 一方NPの場合には、いわゆる属格の「の」は主語の位置でも目的語の位置でもそのNP内の要素ならば自由にいくつでも与えられる。これは今まで見てきた次のような例からも明らかである。

(51) アメリカ空軍のバグダッドの破壊

この観察から、日本語の「の」の付与はおおよそ次のように定式化できる。

(52) $[_{NP} \dots NP^* \dots N] \rightarrow [_{NP} \dots NP \text{ の }^* \dots N]$ ¹³⁾

そして属格の「の」の付与が英語の前置詞ofの挿入と同様に随意的であると仮定すると、目的語NPはこれを元の位置で受け取ってもよいし、受け取らなくてもよいことになる。したがって、目的語NPはD構造の位置に留まることもできるし、主語の位置に移動してそこで「の」を受け取ってもよいことになる。

以上、なぜ日本語でも英語でもSではA移動が義務的なものに対して、NPでは随意的であるかを、格付与の違いから検討した。このように、格付与の違いに基づいてSとNPの間の移動の差が導かれ、したがって(34)、(35)対(39)に見られるSとNPの受動形における「自分」の照応の違いが体系的に説明されることになる。

5.2 受動的名詞化形(2)

次に、(53) にあげたタイプの受動的名詞化形の例を考えてみよう。

- (53) a. 太郎_i による自分_i の友人の殺害
 b. 太郎_i による自分_i の先生の批判

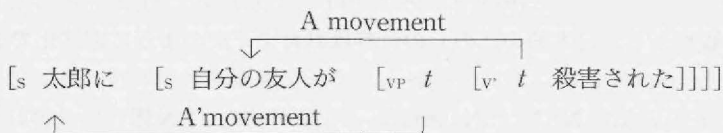
これらの例では「太郎」と「自分」との間に明らかに照応関係が成り立つ。と
 ころがこれに対応するSの受動形の場合にはそうした照応関係は全く不可能で
 ある。

- (54) a. *太郎_i に自分_i の友人が殺害された
 b. *太郎_i に自分_i の先生が批判された

(53) と (54) のコントラストは非常にはっきりとしており、SとNPの対応
 を考えた場合、非常に面白い現象である。

(54) のようなSの場合の非文法性は、今まで見てきた束縛条件から容易に
 説明出来る。(54) は次のようなS構造をもつ。

(55)



A' 移動は「自分」の照応に影響を与えない、つまり元の痕跡の位置に戻って
 束縛条件の適用を受けるので、この文は「太郎に」を元の位置に戻した次の文
 と照応に関しては同一の判断となる。

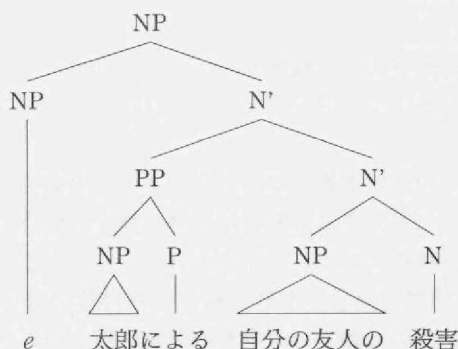
- (56) *自分_i の友人が太郎_i に殺害された

この文では先行詞「太郎」が主語の位置にないので、「自分」の主語指向性の
 条件からまずその非文法性が説明される。さらに「自分」は先行詞「太郎」に
 よってc統御されていないので、こちらの条件にも抵触している。このように、

(54) (および (56)) は「自分」の束縛に関して二重の違反を犯していることになる。

では (53) の NP の場合、照応が可能なのはなぜなのか？この問題を考えるために、もう少し詳しく NP の構造と派生について考えてみる必要がある。前節で受動的名詞化形が「NP による NP の N」の語順をもっている場合の S 構造は移動を含まない次のような構造であることを論じた。

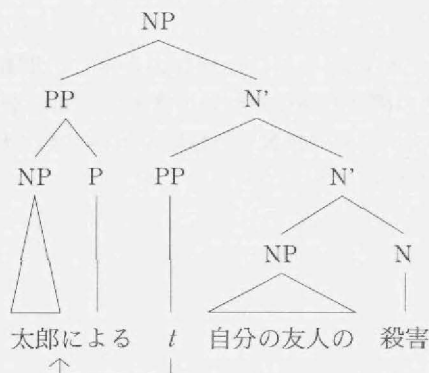
(57)



この構造に基づいて「自分」と「太郎」の照応を説明しようとする、二つの問題が起こってくる。まず第一に、先行詞の「太郎」が主語、つまり NP の指定辞の位置にない。それから後置詞「による」の介在により「太郎」が「自分」を統御出来ない。しかしこれらの問題はかなり自然な方法で解決することが出来ると思われる。

まず最初の問題、つまり主語指向性について考えてみよう。(57) では PP 「太郎による」は主語の位置にないと仮定してあった。しかし、この PP は実際には主語位置に移動すると考えて、次のような S 構造をしていると仮定するならば、この問題は解決される。

(58)



こう考えれば「太郎」が主語の位置にあるので「自分」を束縛出来ることが説明される。しかしここですぐ起こってくる疑問は、Sの受動文の場合にも同じように「に」句を主語の位置に移動することが出来ないのかという点である。面白いことに、この問題は前節で見たSとNPにおける格付与の違いから体系的な説明がつく。もう一度、次の受動文の派生を格理論の観点から見てみよう。

(59) [_S 太郎に [_S 自分の友人が [_{VP} t [_{V'} t 殺害された]]]]

ThemeのNP「自分の友人」はD構造で目的語の位置に生成されるが、他動詞の「殺害する」は受動形態素「される」が付加されることによりその対格付与能力を失うため、「自分の友人」はそのままの位置では格をもらうことが出来ず、そこに留まると格フィルターの違反になってしまう。この格フィルターを避けるため、「自分の友人」は格を受け取れる位置、つまり主格が与えられる主語の位置へ代入操作によって義務的に移動しなければならない。「自分の友人」が主語の位置をすでに埋めてしまっているのです、PP「太郎に」はこの位置へ移動することが出来ない。このように「太郎に」の主語位置へのA移動はブロックされるが、日本語の場合にはかき混ぜ規則を使ってSに付加することにより随意的に要素を前置することが出来る。ただし、すでに論じたようにかき混ぜ規則はA'移動であり、移動先の位置から「自分」を束縛できない。したがって(54)の非文法性が説明されることになる。

一方 NP の場合であるが、その中での格付与に関して前節で次のような属格「の」の付与規則を提案した。

$$(52) \quad [_{NP} \dots NP^* \dots N] \rightarrow [_{NP} \dots NP \text{ の }^* \dots N]$$

つまり、NP 内であればどの位置の NP にでもいくつでも「の」の付与が可能であるというものであった。そしてこれは義務的ではなく随意的に適用される規則であることも証明した。ここで次の例の派生をもう一度考えてみる。

- (60) a. $[_{NP} e \ [_{N'} \text{ 太郎による } [_{N'} \text{ 花子の 殺害}]]]$
 b. $[_{NP} \text{ 花子の } [_{N'} \text{ 太郎による } [_{N'} t \text{ 殺害}]]]$

まず Theme の「花子」は D 構造で目的語の位置、つまり N' 内の補部の位置に生成される。この位置に留まったまま (52) に基づいて「の」の付与が行なわれれば、(60a) の構造が生成される。しかし (52) は NP 内ならばどこでも「の」の付与を許すので、「花子」は目的語の位置で「の」が付与されなくてともよく、主語の位置に移動した段階で「の」を付与されることも出来、その場合には (60b) の構造が生成される。以上のようにこれら二つの派生を考えたわけであるが、実はもう一つの可能性が残されている。それが (58) で見た「による」句の「主語」位置への移動である。つまり、Theme の「花子」が目的語の位置で「の」を付与された場合、「主語」の位置は空のままであり、この位置への「太郎による」の移動はしたがって可能である。もちろん移動しなくてもよいわけであるが重要なのはこの移動が「可能である」という点である。このように、格理論上「による」句が「主語」の位置を占めることが出来るので、それによって「自分」の束縛が可能になり、(53) の照応可能性に関して最初の主語指向性の問題が解決できることになる。¹⁴⁾

次に 2 番目の問題、「による」と c 統御の問題に移る。「による」が P であるならば、その投射 PP の介在によってその中の要素は PP の外側の「自分」を c 統御出来ず、照応関係は成立しないことを予想することになる。しかし (53) では実際、照応が可能となっているわけで、これをどう解決するのが問題であった。「による」を考えるためには、まず S 中に現われる「に」について少し考察する必要がある。「に」句の統語的な機能には様々なものがあるが、その中で使役文に現われる「に」句について注目してみよう。

- (61) 太郎が花子に本を読ませた

この構文に現われる「に」句は形態的に拘束形の主動詞「させる」がとる埋め込み節の主語としての働きをもっていることは日本語の生成文法研究ではよく知られていることである。例えば、「自分」の照応に関して見てみると、「に」句の中の NP は「自分」の先行詞となることが出来る。

- (62) 太郎_iが花子_jに自分_{i,j}の部屋で本を読ませた

cf. 太郎_iが花子_jに自分_{i,*j}の部屋でプレゼントを渡した

3節で見たように「自分」の先行詞はS構造で主語の位置になければならないので、「に」句を含む使役文には次のようなS構造が仮定されることになる。¹⁵⁾

- (63) [_S 太郎が [_S 花子に [_{VP} 本を yom]] -aseta]

やはりここでも NP の「による」の場合と同じ問題が起こってくる。つまり、「に」を P とすると、「に」句の中の花子は PP の外側の要素を c 統御出来ないことになる。しかし (62) に見るように、「自分」との照応が可能であるから、この「に」句の PP は c 統御に関して「透明」であると考えなければならない。

もう一つ、使役文の「に」句の PP が c 統御に関して透明である証拠として、「二次的叙述関係」(secondary predication) に関わる例をあげることが出来る。Williams (1980) 以来、「二次述部」とその「主語」との間には c 統御の概念、もう少し詳しく言うと「相互 c 統御」(mutual c-command) が関係していることが指摘されている。日本語でも Miyagawa (1989) の研究をはじめ二次叙述関係の決定には c 統御の制約が働いていることが示されている。次の例は「様態の二次述部」(depictive predicate) の「裸で」が含まれた文である。

- (64) a. [_S 太郎が [_{VP} 花子を裸で殺した]]

b. [_S 太郎が [_{VP} [_{PP} 花子から] 裸で説明を聞いた]]

(64a) では目的語 NP の「花子」は「裸で」の主語になることが出来るのに

対して、(64b) では PP 中の「花子」を主語として解釈は出来ない。ここで重要なことは「花子」が「裸で」を c 統御出来るかどうかである。(64a) では「花子」は「裸で」を c 統御出来るのに対して、(64b) では PP が介在するため c 統御出来ず、この差が説明される。次の (65) は「に」句を含む例で、a が使役文である。

- (65) a. 太郎が花子に裸で歌を歌わせた
b. 太郎が花子に裸で踊りを教えた
c. 太郎が花子に裸で殴られた

a の使役文の例では「花子」は「裸で」の主語と解釈されうるが、b, c の使役文ではない場合の「に」句中の「花子」はそう出来ない。したがって、この二次叙述関係の場合を見ても、使役文の埋め込み文の主語に現われる「に」句は c 統御に関して透明であることが分かる。

このように、S で「に」句が主語の位置に現われた場合に PP の c 統御に対する透明性が得られるのであるなら、NP で「による」句が主語に現われた場合にその投射の PP もまた c 統御に関して透明であると考えerことは極めて自然であると思われる。実際「による」句が c 統御に関して透明であることの経験的証拠として先ほど使役文の場合に見た二次述部のテストを利用することが出来る。Takezawa (1993) が指摘したように、「裸で」等の様態の二次述部は「の」を伴って NP 内に現われることが出来る。

- (66) a. 太郎の裸での演技
b. 魚の生での試食

面白いことに、「による」句中の NP は様態の二次述部の主語として解釈することが出来る。

- (67) a. 太郎による裸での演技
b. 太郎による無防備状態での攻撃

もちろん、その他の PP 中の NP はこうした叙述関係をもてない。

(68) 太郎に対する無防備状態での/裸での攻撃

これと平行して普通の PP 内の NP は「自分」の先行詞となれない。

- (69) a. *太郎_i に対する自分_i の先生の/による批判
 b. *花子_i への自分_i の新しい先生の紹介

以上、「による」句は使役文の主語の位置に見られる「に」句同様、その PP は c 統御に関して透明であることを検証した。¹⁶⁾ もちろん、理論的にこの透明性をどのように説明するかは別問題であり、いろいろな方法が考えられるが、ここではこうした理論的問題については扱わない。

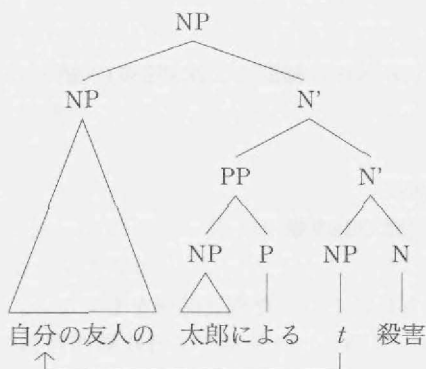
5.3 NP 内での「かき混ぜ」

最後に NP 内の「自分」の束縛に関して考えなくてはならないのが次のような例である。

- (70) a. 自分_i の友人の太郎_i による殺害
 b. 自分_i の先生に対する太郎_i の批判

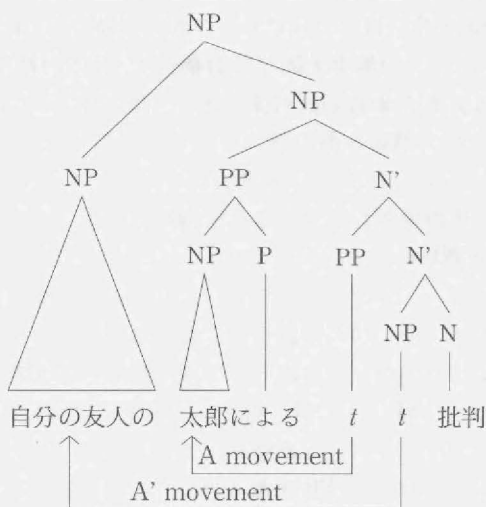
これらの例において「太郎」と「自分」の照応は可能である。まず (70a) について考えてみる。4.2節で受動的名詞化形が「NP の NP による N」の語順をもつ時の構造は次のようになっていることを論じた。

(71)



しかし (70a) の「自分」と「太郎」の照応が可能なことを考えた場合、この構造では不都合なことが生じる。なぜならば、「自分の友人」は主語位置に A 移動によって代入されたものなので、この移動先の位置において先行詞に c 統御されなければならないにもかかわらず、「太郎」によって c 統御されていない。しかも先行詞の「太郎」が指定辞の位置に入っていないので「自分」を束縛できないはずである。したがって (70a) の「太郎」と「自分」の間の照応可能性は「NP の NP による N」の語順の場合に別の派生の可能性があることを示唆している。その可能性には実際、次のような派生を考えることが出来る。

(72)



この派生は、PP「太郎による」が主語の位置に移動するとともに、Theme の NP「自分の友人」は元の補部の位置で「の」を付与された後、かき混ぜ規則によって NP に付加するというものである。PP の主語への移動は前節で見たように可能な操作であり、ここでの新たな提案は NP 内でかき混ぜ規則が適用されるという点である。この提案は論理的にも経験的にも妥当であると思われる。まず、日本語で S 内では適用されるかき混ぜ規則が NP 内で禁止されるべき理論的な理由は特に見当たらない。むしろ、存在すると考えた方が自然である。

さらに経験的には (70b) の例からその妥当性を証拠付けることが出来る。

(70b) は次の能動文の名詞化形の一つであると考えられる。

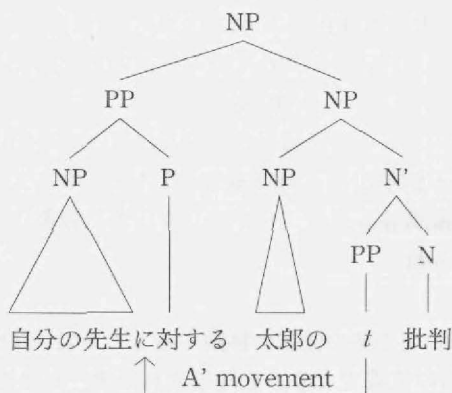
(73) 太郎が自分の先生を批判した

「非影響対象」(Unaffected Theme) を目的語にとる「批判する」等の他動詞を名詞化した場合に、その目的語は「の」あるいは「に対する」のどちらかによってマークされる。

(74) 太郎の自分の先生の/に対する批判

項構造を考えると、「自分の先生」は「の」でマークされる場合も「に対する」によってマークされる場合も、Sの場合と同じくD構造でN'内の補部の位置に生成されると考えられる。そうすると、(70b)の派生は次に示すようになってはならない。

(75)



「太郎」は能動形の Agent なので、D構造で主語の位置に生成される。そして、PP「自分の先生に対する」がかき混ぜ規則でNPに付加される。こう考えれば、この場合の「太郎」と「自分」の照応が説明出来る。つまり、PPはA'移動によって前置されているので元の位置で束縛条件を満たすが要求され、主語位置にある「太郎」とのc統御関係をもてるのでこの照応が可能なが説明される。このようにNP内でのかき混ぜ現象の存在が(70b)によって立

証され、(70a) に対する (72) の派生も経験的に支持されることになる。¹⁷⁾

6. かき混ぜ現象と格付与の関係

5 節で NP 内にもかき混ぜ現象が存在することを論じた。この節では、この事実が Saito (1985) が主張している格理論に基づく S の場合のかき混ぜ現象の説明に対してもつ意義を論ずる。

Saito は S において主格「が」によりマークされている NP はかき混ぜ規則により移動できないという観察を行い、これを説明するため次のような提案を行なっている。Saito によれば、「が」は英語の主格と違って格付与子 Infl によって統率 (government) に基づいて与えられる抽象格 (abstract Case) ではなく、[NP, S] という位置に現われた NP に単に「構造的に」与えられる、彼の言葉で言えば、「内在格」(inherent Case) なので、これをかき混ぜ規則によって A' 位置へ移動した際に残る痕跡に抽象格は与えられない。すると、A' 移動によって残された痕跡は「変項」(variable) とみなされるので、変項に対する一般的な制約である「変項は抽象格をもたなければならない」という条件に違反することになり、「が」句のかき混ぜ規則による移動が不可能なことが説明出来るとしている。

しかし、この提案は前節で見た属格「の」句のかき混ぜが可能であるという事実から考えると問題が生ずる。属格は一般的にもまた Saito でも抽象格とは考えられておらず、Fukui (1986) 等では「が」と同様に「構造的に」与えられる格、Saito 流に言えば「内在格」とみなされている。したがって、Saito の議論に基づけば「の」句はかき混ぜによる移動が不可能なことを予測してしまう。以上の考察が正しいとすると、Saito の「が」句の移動に関する事実観察が間違っているのではないかという結論に達する。ここで Saito が「が」句が移動出来ないとしている例を考えてみよう。

- (76) a. そのお菓子が_i ジョンが [S_i 美味しいと] 思っている(こと)
b. その議論が_i ジョンが [S_i 面白いと] 思っている (こと)

Saito はこれらの例を非文法的であると判断しているが、私にはそれほど悪い文とは思えない。もちろん、次のように「が」によってマークされた似た種類の名詞(下の例の場合には人を表す名詞)の順番が入れ替わった場合には解釈

は極めて難しい。

(77) *メアリーが_iジョンが_j [s_i 天才だと] 思っている (こと)

したがって基本的には文法上「が」句のかき混ぜによる移動は可能で(76)は文法的であり、(77)のおかしさはしばしば指摘されているように発話に関する知覚の問題として扱うのが妥当ではないかと思われる。

Saito はこうした文境界を越えるいわゆる「長距離」の移動の問題だけではなく、同一節内で「が」句をかき混ぜ規則によって移動することにより生ずる問題を数量詞移動の現象との関係で論じている。ここでは具体例を出さないが、その基本的な考えだけをまとめると、「が」句が移動されることにより何回でもかき混ぜによる移動が可能になりD構造で生成された基本語順がかき混ぜ規則の複数回の適用によってS構造として再び生成されることが可能になってしまい、数量詞移動の現象に説明が与えられなくなってしまうというものである。しかし最近の「経済性」(economy: cf. 注17)の概念を使えば、この問題も解決出来るのではないかと思われる。非常に単純化して述べるなら、D構造で生成された表面上可能な語順をわざわざ随意的なかき混ぜ規則による移動を使って複雑に派生させるのはコストが高い、つまり「経済的」ではないと考えれば、なぜ「が」句が同一節内で移動出来ないか説明が可能であろう。

この節での議論にはかなり大まかなところもあったが、かき混ぜ規則によるNP内での「の」句の移動が可能であるという5.3節の観察から、Saito の格理論に基づく「が」句のかき混ぜ現象に対する説明の問題点を指摘し、その解決策を探った。

7. まとめと今後の課題

本稿ではX'理論を出発点として、「自分」の照応現象を詳しく見ながら、日本語のNPの階層構造と派生をSとの比較に基づいて分析した。日本語のNPに関する主な主張点は次のようにまとめられる。

1. 日本語のNPはSと同じようにX'理論に基づいた階層構造をもっている。
2. 移動に関しても、A移動(受動的名詞化形におけるNP移動)、A'移動

(かき混ぜ規則) ともにその領域内で適用される。

3. 「自分」の束縛に関する見かけ上のSとNPとの差は「が/を」と「の」の格付与とそれに基づく移動の違いから説明される。

最後にここでは論じられなかったいくつかの点に関して少し触れておきたい。最近の生成文法のNPの内部構造の研究では極めて重要なAbney (1986)に始まるDP仮説についてこの議論の中ではまったく論じなかった。日本語にはDやI等の機能範疇 (Functional Category) が存在しないというFukui (1986)の主張に対して、Saito and Murasugi (1990) およびMurasugi (1990)ではいわゆる「N' 削除」(N' deletion) 現象に基づいて日本語にもDが存在するという議論を行なっている。彼らの議論はかなり説得力をもっており、ここでの日本語のNPの考察とも深く関わってくるものと思われる。特にA/A'移動の区別に関してはDP仮説を用いることによってさらに体系的な分析が可能になると予想される。

日本語の格付与に関しても十分には検討を行なわなかった。特に「が」と「の」については極めて面白い共通点と相違点があり、Takezawa (1987)の研究や最近の格に関する新しい見方とも合わせて理論的に考え直す必要がある。それから、束縛現象に関しては「自分」のみを取り上げ、判断が微妙なため「彼」や「お互い」を扱わなかったが、特に「お互い」についてはSaito (1992)等がその束縛現象の特異性に基づき、かき混ぜ規則が実はA移動でもA'移動でもありうるという議論を行なっている。これらの代名詞や照応詞のNPとSにおける振る舞いも含めて日本語の束縛現象を体系的に見ることも重要である。もう一つは項構造の問題である。最近Grimshaw (1992)に項構造の観点からのSとNPの対応関係に関する包括的な研究があるが、ここではこの点に関して言及出来なかった。また項構造と関係して、日本語の心理述語の名詞化形における構造と束縛現象との間に記述的にも理論的にも面白い事実があるが、また稿を改めて論じたい。

注

- *本稿を書くにあたり、文芸・言語研究科大学院生、武田和恵さんとの議論が有益であったことを付記しておきたい。本稿執筆後、東京地区言語学サークル(TACL) 6月例会(6月12日、明治学院大学)においてこれを修正、拡大したものを口頭

発表した。そこでは、判断がはっきりしていなかったいくつかのデータを新しいデータも加えて再吟味するとともに、特に格付与に関する問題を、最近の生成文法の新たな展開をも踏まえて、理論的に論じた。

- 1) 厳密に言うと、ここには移動は上昇移動 (upward movement) のみが許され、下降移動 (downward movement) は許されないという大前提があるが、これは理論的には「痕跡」(trace) は「適正統率」(properly govern) されなければならないという条件によって保証される。
- 2) 「c 統御」の定義は以下の通りである。

α c-commands β iff neither α or β dominates the other and the first branching node dominating α dominates β (Reinhart (1976))

- 3) ここで問題になっているのは階層構造に基づいた c 統御であって先行関係 (precedence) ではないことは次の例の照応関係が可能なことから明らかである。

(i) [_S [His_i mother] [_{VP} loves John_i]]

- 4) 日本語の生成文法研究で通例行なわれているように、主文にトピックの「は」句がないことから感じられる不自然さを避けるため、「こと」を文末に加えてある。以下でも、「は」句の欠落によって不自然さが起こるような場合には、適宜「こと」を付けて例文を提示する。
- 5) (18) の非文法性は「自分」とその先行詞が別の節に含まれているからという訳ではない。よく知られているように、「自分」は c 統御の条件を満たしていれば、別の節に先行詞をとることも出来る。

(i) [太郎_i が [次郎_j が自分_j の先生を批判したと] 思っている] (こと)

- 6) ここで注意して欲しいのは、上の条件は前節での Condition C とは別のものであるという点である。Condition C は R 表現に対する条件であり、これは照応表現「自分」に対する条件である。
- 7) 単なる先行関係だけで「自分」の照応関係が説明出来ず、構造的な c 統御の概念を持ち込まないと説明出来ない別の例としては次のような文がよく知られている。

(i) [_{NP} [太郎_i が飼っている] 犬_j] が自分_{*i,j} の足に噛みついた

この例で「自分」が関係詞節内の主語「太郎」を先行詞とすることが出来ないのは、「太郎」が NP の介在によって「自分」を c 統御出来ないからである。

- 8) 次の受動文では、S 構造において先行詞が主語の位置にあり、かつそれが「自分」を c 統御しているにもかかわらず、照応関係は成り立たない。

- (i) *太郎_i が自分_i に *t* 診察された
cf. 太郎_i が自分_i を診察した

これは強交差 (strong crossover) と呼ばれる現象で、別の説明が必要となるが、ここではこの問題に立ち入らない。

- 9) ここでは格の問題を無視して議論を進めるが、格に関してはすぐ下で論ずる。
10) 格フィルターは次のように定式化されている。

*NP if NP has phonetic content and has no Case (Chomsky (1981, p. 49))

- 11) Chomsky (1986) では別の属格付与の方法が提案されている。そこでは N は格付与能力をもつと仮定されている。具体的には、N は特定の θ 役割と結びついた内在格 (inherent Case) である属格を D 構造でその補部の NP に付与 (assign) し、S 構造でこの属格を与えられた NP はそのままの位置に留まった場合には “of NP” として具現化 (realize) し、移動されて主語の位置に現われた場合には “NP’s” として具現化するという提案である。
12) ただし、「が」の付与には難しい問題が残されている。よく知られているように、いわゆる「状態述語」(stative predicate) を含む文では目的語に「が」が与えられる。

- (i) 太郎が英語が出来る (こと)

Takezawa (1987) ではこうした目的語への「が」の付与に対して格理論に基づいて体系的な分析を行なったが、なぜ受動文では目的語位置に「が」が付与出来ないのに、状態述語文ではそれが可能なのかという大きな問題が残る。これに関しては稿を改めて論じたい。

- 13) (52) の NP* は NP の数があることを示している。もう一つ (52) に関して付け加えておくと、「の」は NP のみならず、PP や S' にも与えられなければならない。

- (i) a. 現実からの逃避
b. 先生との討論
c. 私の考え方が正しいとの主張

この問題を含めて「の」の詳しい分析に関しては、Murasugi (1990) を参照されたい。

- 14) 「の」と「による」の関係について少し触れておく必要がある。注13でも述べたように、日本語では英語と違って NP 内では NP のみならず PP にも属格の「の」が付与されなければならない。とすると、複合後置詞の「による」にも形態上は現われていないが「の」が与えられていなければならない。ここでは次のような形態規則を仮定しておく。

(i) によって+の → による

「によっての」の表面連鎖は不自然ではあるが、その他の複合後置詞には「に関する/に関しての」、「に対する/対しての」等両方が可能なものが存在しており、「によっての」が不自然なのは語彙的な特殊性によるものであると考えられる(動詞や形容詞のいわゆる連体形も理論的にはV/A+「の」とみなすことが出来る)。このように考えると、(60)でNPの「花子」が指定辞の位置にA移動する際、「の」が補部の位置ではなく、指定辞の位置で与えられるように、「による」も移動前の位置ではなく指定辞の位置で「の」を付与されることになる。この考え方は、A移動の場合移動される要素は格を移動先で受け取るという基本的な特徴とも合致する。

PPに関して理論的に一つ重要な問題は、なぜそれに「の」は付与されるが「が」は不可能なのかという点である。例えば受動文でPPを主語の位置に移動させて「PP+が」とは出来ないのか?ただし、難易構文(tough construction)等では「PP+が」が可能であり、この構文に関してはTakezawa(1987)で詳しく論じてある。

- 15) (61)には次のようなコントロール構造を仮定することも可能であるが、ここでは議論の都合上(63)を仮定する。

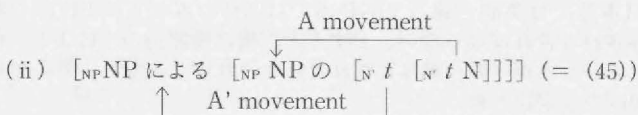
(i) [_S 太郎が花子_i [_S PRO_i [_{VP} 本を yom]] -asetar]

- 16) 「による」に関してもう一つ付け加えておくべきことは、2種類の「による」があるという点である。例えば次のような表現が可能である。

(i) アメリカ空軍によるハイテクミサイルによるバグダッドの破壊

最初の「アメリカ空軍による」はAgentを表すもので主要部のNがとる項とみなせるが、2番目の「ハイテクミサイルによる」はInstrumentとしての意味役割を持っており付加詞的な働きをもつと考えられる。これと関係すると思われるのがいわゆる「に」受動文と「によって」受動文の対立である。この2種類の受動文の最近の研究としてはHoshi(1992)を参照。

- 17) 上ではNP内にもかき混ぜ現象があることを論じたが、そうすると5.1節で考察した(34)、(35)のbの例に関して問題が生ずる。5.1節ではそれらは(i)ではなく(ii)のS構造をもっているとの主張を行なった。

(i) [_{NP} e [_{N'} NP による [_{N'} NP の N]]] (= (46))

しかし、かき混ぜがNP内にも存在するということになれば、(ii)は原理的に可能な構造として派生されることになり、それらの例は文法的であるという予想が得られることになってしまう。

これを解決する一つの方法としては、最近の「経済性」(economy: Chomsky (1992))の概念を援用することが出来るのではないと思われる。ここでは「経済性」を「派生の長さ」に基づいて次のように考える。つまり、もし一つのS構造に対して二つ(以上)の派生が普遍文法の原理上可能な場合には、「短い」方の派生がコストが少なく、そのみが可能な派生構造として許されるとする。これに基づいて(i)と(ii)の派生を比べてみると、明らかに(i)の方の派生が「短く」、したがってこの構造のみが許されることになり、この問題が解決出来ることになる。もちろん、「経済性」についてより厳密な定義をしなければならないことは言うまでもないが、基本的にこの路線での説明はかなりの妥当性をもっていると思われる。

ここまでは(34)、(35)のbが非文法的であるという判断に基づいて議論を行ってきたが、実際のところその判断は微妙であり、Sにおける「自分」に関する判断や次の例に比べて容認性が高いように思われる。

- (iii) a. *自分_iの友人の太郎_iの殺害 (はとても不幸な出来事だった)
 b. *自分_iの先生の太郎_iの審査 (はまだ行なわれていない)

もし(34)、(35)のbが実際には文法的であるという判断に立って議論を進めるなら、それらが(ii)の派生をもっていることの証拠になり、ここでの問題は解消する。この問題に関しては事実観察および理論の両面からより詳しく分析する必要があるが、いずれにせよ本稿での日本語のNPの構造と派生に関する提案を否定することにはならない。

参考文献

- Abney, S. (1986) *The English Noun Phrases and Its Sentential Aspect*, Ph. D. diss., MIT.
 Chomsky, N. (1970) "Remarks on Nominalization," in *Readings in English Transformational Grammar*, R. A. Jacobs and P. S. Rosenbaum (eds.) Ginn and Co., Waltham, Mass.
 Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris Publications, Dordrecht.
 Chomsky, N. (1986) *Knowledge of Language*, Praeger, New York.
 Chomsky, N. (1992) "Some Notes on Economy of Derivation and Representation," in R. Freidin (ed.), *Principles and Parameters in Comparative Grammar*, MIT Press, Mass.
 Farmer, A. (1980) *On the Interaction of Morphology and Syntax*, Ph. D. diss., MIT.
 Fukui, N. (1986) *A Theory of Category Projection and Its Applications*, Ph. D. diss., MIT.

- Grimshaw, J. (1990) *Argument Structure*, MIT Press, Mass.
- Hoji, H. (1985) *Logical Form Constraints and Configurational Structures in Japanese*, Ph.D. diss., Univ. of Washington.
- Hoji, H. (1990) Theories of Anaphora and Aspects of Japanese Syntax, ms. USC.
- Hoshi, H. (1991) "The Generalized Projection Principles and Its Implications for Passive Constructions," *Journal of Japanese Linguistics* 13.
- Jaeggli, O. (1986) "Passive," *Linguistic Inquiry* 17.
- Lees, R. (1960) *The Grammar of English Nominalization*, Mouton, The Hague.
- Miyagawa, S. (1989) *Structure and Case Marking in Japanese: Syntax and Semantics* 22, Academic Press, New York.
- Murasugi, K. (1990) *Noun Phrases in Japanese and English: A Study in Syntax, Learnability, and Acquisition*, Ph. D. diss., Univ. of Connecticut.
- Reinhart, T. (1976) The Syntactic Domain of Anaphora, Ph. D. diss., MIT.
- Saito, M. (1984) "On the Definition of C-Command and Government," *NELS* 14.
- Saito, M. (1985) *Some Asymmetries in Japanese and Their Theoretical Implications*, Ph. D. diss., MIT.
- Saito, M. (1992) "Long Distance Scrambling in Japanese," *Journal of East Asian Linguistics* 1.
- Saito, M. and H. Hoji (1983) "Weak Crossover and Move- α in Japanese," *Natural Language and Linguistic Theory* 1.
- Saito, M. and K. Murasugi (1990) "N' Deletion in Japanese," *The Univ. of Connecticut Working Papers in Linguistics* III.
- Takezawa, K. (1987) *A Configurational Approach to Case-marking in Japanese*, Ph. D. diss., Univ. of Washington.
- Takezawa, K. (1993) "Secondary Predication and Locative/ Goal Phrases," in N. Hasegawa (ed.), *Japanese Syntax in Comparative Grammar*, Kuroshio, Tokyo.
- Williams, E. (1980) "Predication," *Linguistic Inquiry* 11.